

中世（鎌倉・安土桃山時代）

武士の台頭と今に伝わる室町文化

中世は、鎌倉時代・南北朝時代・室町時代・戦国時代・安土桃山時代を指し、武家政権の樹立が古代との画期になります。時代名は当時の政治の中心地の地名から名付けられますが、南北朝時代や戦国時代は、朝廷の分裂や下克上による動乱など当時の国内の政治状況によって命名されています。

鎌倉時代の成立以降の政治史の流れは、次のとおりです。
一一八五年、壇ノ浦の戦いで平氏が滅亡した後、源頼朝は守護・地頭を任命し、東国を中心に支配権を握りました。

一一九二年、朝廷から征夷大將軍に任じられ、鎌倉を本拠地として幕府を開き、本格的な武家政権が成立しました。

頼朝の死後、北条時政は執権として幕府の実権を握り、以後、北条氏一族がその地位を独占し、執権政治を行います。

一二三二年、孫の泰時は、武家による最初の法律となる「御成敗式目」を制定し、幕府は発展期を迎えました。

一二七四年と一二八一年のモンゴル軍の襲来に対し、執権の時宗は、御家人に十分な恩賞を与えることができず、また、北条氏の独裁に対する不満が蔓延し、幕府の支配は揺るぎ始めました。

一三三三年、倒幕を決意した後醍醐天皇に呼応して、楠木正成や足利尊氏などが味方し、鎌倉幕府を倒しました。しかし、後醍醐天皇は天皇中心の政治（建武の新政）を始めたため、武士の不満を招きます。足利尊氏は武家政権の復活を呼びかけ挙兵し、京都に新しい天皇（北朝）を擁立します。後醍醐天皇は吉野（南朝）に逃れました。この二つの朝廷が生まれた時代を南北朝時代といいます。一三三八年、尊氏は北朝から征夷大將軍に任命され、京に室町幕府を開きます。一三九二年、三代義満は南朝に和平を呼びかけ、南北朝の合体が実現します。また、日明貿易を始めるなど幕府は経済的に発展しました。一四六七年、八代義政の時に將軍の後継ぎ問題を巡って守護大名の対立がおこり、一年にわたる応仁の乱が起きます。応仁の乱以後、各地で下克上が始まり、一〇〇年間もの間、戦国時代が続きます。一五七三年、一五代義昭が信長により京から追放され、室町幕府は滅亡します。

信長や秀吉が天下統一を進めた時代は、安土桃山時代といえます。



武士の屋敷の様子

関市の中世

中世の遺跡は、平野が広がる関地域を中心に多く発見されています。重竹遺跡は市内最大規模の集落跡で、屋敷の周りを囲む堀が見つかっていることから、地域の土地開発を主導する領主層などの存在が推測できます。（武士の屋敷参照）

山茶碗や瀬戸・美濃製品、常滑焼の甕、青磁・白磁などの出土は、広域にわたる商品流通が行われていたことを示しています。また、板取の津井谷北遺跡や武儀の上り瀬

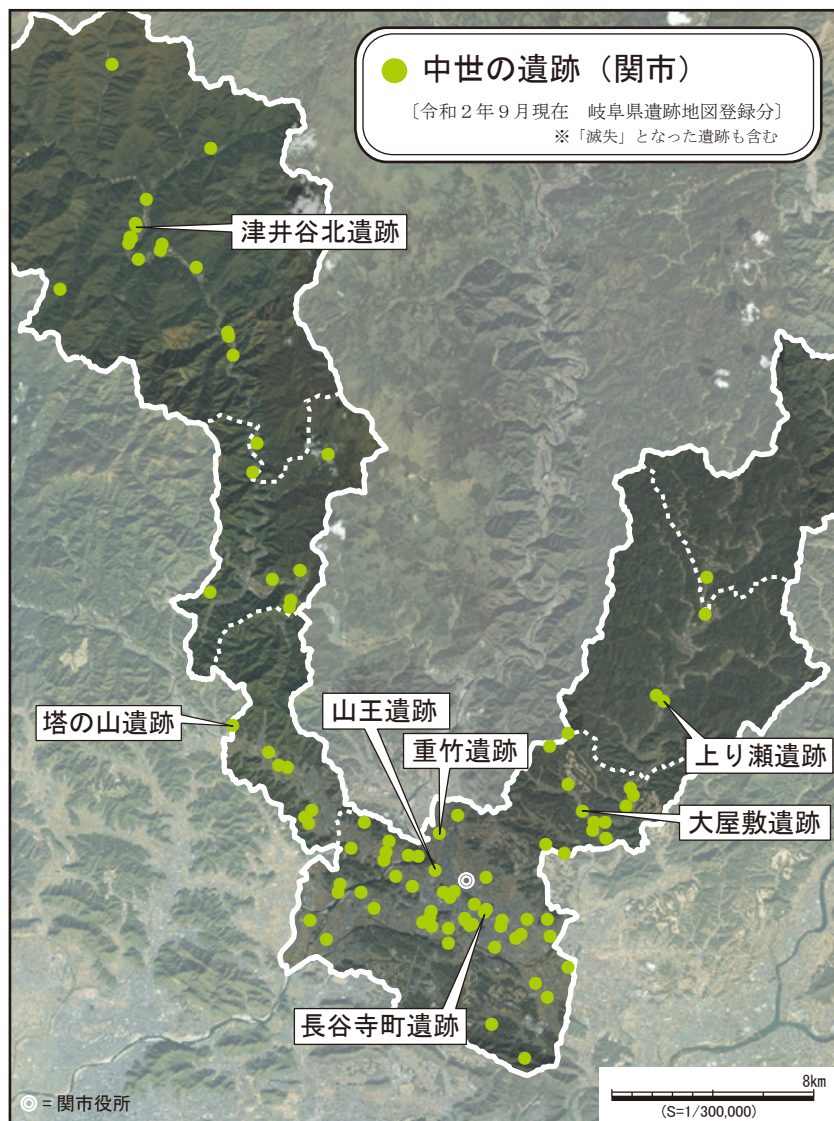
遺跡が発見されているので、小河川の上流域まで民衆の活動が及んだことが分かります。

室町時代には茶を飲む習慣が地方にも伝わり、市内では天目茶碗などの茶器や風炉と呼ばれる湯沸し器（下図参照）が出土しています。

近年、春日神社の隣接地で発見された古町遺跡は、室町時代の鍛冶作業に関わる遺構・遺物が多く発見された遺跡で、関鍛冶の成立した時期（一五世紀初め）と重なることから注目されています。



茶の湯の道具



※ 遺跡名は、図録や展示で紹介している遺跡のみ表示しています。



中世の台所事情 囲炉裏の登場

市内の発掘調査により、縄文時代から室町時代の煮炊きの変遷が明らかになっています。

縄文時代早期は底が尖った土器を置いて、煮炊きをしました。縄文時代中期は竪穴建物の中央辺りに石囲炉をつくり、平底の土器を固定します。

弥生時代は、竪穴建物の中央を浅く掘り下げた地床炉で、石組みの無い簡素なつくりです。土器は平底から台付きとなり、熱効率を高める工夫をしています。

古墳時代中期にはカマドが登場します。竪穴建物の壁際に粘土でドーム状の覆いをつくり、屋外に煙を排出する煙道が付設されます。また、蓄熱効果の向上により「蒸す」という調理方法が生まれました。

室町時代以降、庶民の住まいは、半地下式の竪穴建物から地表面を床とする掘立柱建物へと変わり、建物内には囲炉裏と呼ばれる火焚き場が設けられます。

山王遺跡の炉跡は室町時代の建物跡の壁際にあり、囲炉裏の可能性ががあります。

山王遺跡では鍋は出土していませんが、近隣の重竹遺跡では左右一対の通し穴がある内耳鍋が出土していることから、天井の梁から吊るした自在鉤(じざいかぎ)に掛けて、炉の上で使用したと推測できます。

また、重竹遺跡では、羽釜(はがま)も出土しており、カマドも併存していたようです。

羽釜は土製で、胴部の縁まわりに「つば」と呼ばれる突起が付いており、それをカマドの上面にあいた穴にはめ込んで飯を炊きました。



山王遺跡で発見された炉跡



囲炉裏の復元図



羽釜とカマド

道の駅・平成の北、約1・1kmにあり、大門城があったと伝わる城山と津保川に挟まれた南北に細長い河岸段丘上に立地しています。

平成二二年(二〇一〇)の第一次調査では、日常雑器の山茶碗や山皿を多量に含む廃棄土坑を発見しました。二次調査では、断面V字形の溝が見つかり、出土遺物の特徴から一五世紀後半から一六世紀中頃まで機能していたことが判明しており、領主などの屋敷の区画溝と考えられます。

津保川上流域の人々の暮らしの営みが少しずつ明らかになってきました。



出土遺物



屋敷の区画溝

山王遺跡 (下有知)

郡上に通じる国道一五六号線沿いにあります。向山の南向き斜面の裾部に立地しており、昭和五九年(一九八四)、工場用地造成に伴い、発掘調査が実施され、縄文時代晩期と弥生時代中期の土器が多く出土しました。また、調査区北端では、室町時代の礎石建物一棟が発見されました。建物の規模は、五間(九・四m)×四間(七・五二m)の東西棟と推定できます。建物の山側には、幅四〇cm程の石組みの雨落ち溝が設置され、建物の北面から東面に延びています。

建物内部の西壁には、川原石を用いて正方形に囲んだ炉跡が見つかりました。その他に屋内では、排水施設と思われる溝や集石、外側では偏平な川原石を敷き詰めた施設があるなど、当時の建物の構造を知る上で貴重な発見となりました。

山茶碗と平碗や天目茶碗などの古瀬戸製品、市

山王遺跡 (下有知)



礎石建物



出土した茶の湯の道具(風炉)



出土遺物

内では他に出土例の無い風炉(茶の湯の道具)が出土しました。

中世（鎌倉・安土桃山時代）

重竹遺跡（下有知）

鍛冶屋敷跡

長良川左岸の扇状地から中位段丘にかけて広がる広大な遺跡です。昭和五十六年（一九八一）に行われた東海北陸自動車道（長良川サービスエリア下り）の建設に伴う発掘調査では、室町時代の鍛冶屋敷跡が見つかりました。

約四〇m四方を小石混じりの土塁で囲み、南側には門があります。門をくぐると左手に建物があり、建物内には真っ赤に焼けた火床が見つかっています。火床からはフイゴの羽口や焼土、木炭、鉄滓が出土していることから鉄製品の鍛造（赤く熱した鉄を打ち叩き、道具を作り出すこと）を行っていたと考えられます。

屋敷内では、多量の砥石の他、瀬戸や美濃の焼物、かわらけ、中国陶磁器、銅銭、火打金など多種多様な生活品が出土しました。

調査地点近くに「兼定」の小字があることから、関鍛冶職を代表する二代兼定の屋敷跡とする意見があります。



鍛冶屋敷跡全景



鍛冶屋敷跡出土品

重竹遺跡 B地点の井戸

昭和五十七年度の東海北陸自動車道建設に伴う発掘調査で発見されました。

直径約八mの円形の掘り方を有し、中央やや北西寄りにほぼ正方形に川原石を組んで井戸枠としています。一辺約一・一mあり、深さは四・七m以上です。

当区域の基盤は礫層で、狭い掘り方では地下水脈に達することができないため、大規模な掘り方を必要としたと考えられます。

出土遺物の特徴から一三世紀後半から一六世紀初頭まで使用されたようです。



井戸跡

重竹遺跡 A地点九九号墓穴

長さ一・四三m、幅〇・七六mの長方形の墓穴で、偏平な円礫を並べています。石の下からは山茶碗や山皿の他、蓋付きの合子（容器）が出土しました。完形で、底部外面には「□家合子記」の銘があります。合子の内部には、青磁の破片が入っていました。

墓穴の周囲は大型の円礫で区画しており、土盛りがあった可能性があります。

重竹遺跡で発見された墓穴は大半が素掘りの穴で、副葬品は無いことが多いです。

少なくとも庶民の墓ではなく、領主などの地域を治めた人物の墓と考えられます。



合子（ごうす）出土



上：合子（ふた・身）
下：「□家合子記」銘

重竹B地点出土の常滑焼きの大甕



重竹遺跡B地点の調査は、昭和五十五年（一九八〇）度に土地改良工事に伴い実施され、五十七年（一九八二）度には東海北陸自動車道の建設に伴う発掘調査が行われました。二次に亘る発掘調査により、古墳時代後期から奈良時代の堅穴建物七棟、掘立柱建物四棟や中世の屋敷・溝・土坑群が発見されました。

中世の遺構は調査区全域で無数に見つかり、出土遺物の量も膨大です。

調査区北部では、南北に底（ひさし）が付く掘立柱建物を中心に建物群が口の字形に配置されており、屋敷地を形成しています。その中の堅穴状遺構から出土したのが、常滑焼の大甕です。

数十点に及ぶ破片を接合した結果、口径50cm、高さ78cm以上となりました。底部は失われていましたが、全形を復元できる土器としては市内で最大です。

毎日の生活に飲み水は欠かせません。重竹の集落では、長良川などの自然の川水や掘井戸を水源としていたと考えられます。常滑焼の大甕は、水甕として利用された可能性があります。石組みの井戸とは20m程の距離ですので、井戸から汲み上げた水を大甕に溜めたことが推測できます。



常滑焼の大甕

長谷寺町遺跡（長谷寺町）

平成二十一年（二〇〇九）、国指定重要文化財の新長谷寺の防災設備事業に伴う工事立会調査で発見されました。本堂北側の防火水槽の撤去・新設工事に立ち会った際、遺物が出土したため、一時工事を中断し、寺側と協議後、記録保存調査を実施しました。

調査の結果、調査区の東西壁沿いで土師器皿を多量に含む土坑を発見しました。平面では確認できませんでしたが、二基の土坑は埋土や位置関係から同一の遺構で、東西方向の溝の可能性が高く、寺域の北限を示す成果として興味深いです。



出土遺物



遺構写真

塔の山遺跡（武芸川町谷口）

大小二個体の壺は、昭和四〇年（一九六五）頃、武芸川町谷口金屋の山中で出土したもので、武芸小学校辺りでは、この種の壺が多く出土するという記録が残っています。

発掘時に立ち会った武芸小学校の教員が資料として活用するために大切に保管していました。壺は肩部四ヶ所に耳が付いた灰釉の四耳壺で、鎌倉時代前半です。口縁部を意図的に割り、また底部に小穴を開けています。各地の中世墓の出土例と同じ特徴を持つので、火葬人骨を納めた骨壺として、山中に埋葬したと考えられます。



底部穿孔



灰釉四耳壺

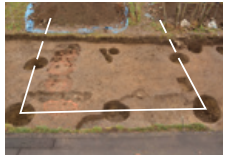
津井谷北遺跡（板取田口）

板取字下街道（田口地区）にあり、板取川と急峻な岩山に挟まれた段丘上に立地しています。市道の改良工事に伴い、発掘調査した結果、直径六〇cm以上の大形の柱穴が等間隔で並ぶ掘立柱建物を発見しました。

また、高温により地面が真っ赤に被熱した炉跡が並列して見つかりました。下層から中世の陶器片が数点出土していることから、時期は中世以降です。北西の山裾には田口城跡があり、中世期に田口地区の活動が活発になった様子が窺われます。



出土遺物



掘立柱建物

古町遺跡（平和通四丁目）

安桜山と津保川に挟まれた台地上にあります。東側には関川が南流し、対岸には中世に關鍛冶職の惣氏神として信仰を集めた春日神社が所在します。

刃物ミュージアム回廊整備事業に伴う発掘調査によって、炉跡や焼土を含む土坑が多数重なる様子が確認されました。炉の底に溜まって出来る椀型滓が合計一六〇kg出土し、フイゴの羽口や鍛錬の際、飛散した鍛造剥片や空気中で冷やされてできる粒状滓も検出できました。古町遺跡では鉄を溶かす作業が繰り返行われ、短刀も出土したことから刀鍛冶も行われていたと考えられます。一四〜一七世紀の陶磁器等が一七〇〇点以上

大屋敷遺跡（志津野）

富野中学校の南約一〇〇mに位置します。津保川の支流の小野川に向かって緩やかに傾斜する東向き斜面に立地しており、平成二十二年（二〇〇九）の第一次から二十七年（二〇一五）の第四次調査まで行われています。

第二次調査では、奈良時代の堅穴建物五軒の他、中世の掘立柱建物、ピット列、土坑群を発見しました。掘立柱建物は二×二間以上の南北棟で調査区外に数棟、発見される可能性があります。土坑は方形で、列状に並ぶ特徴から墓穴を想定しています。津保川の谷筋から長良川へ通じる道沿いの小集落と言えます。



出土遺物



遺跡全景

関鍛冶発祥の地

出土し、長期間に亘る人々の営みが確認でき、関村絵図に描かれた旧道に面して町並みが形成されていたと推測できます。関鍛冶の成立期（応永期）と重なることから、関鍛冶の起源や中世関町を探索上で重要な遺跡です。



小鍛冶復元図



多量に出土した椀型滓

近世（江戸時代）

江戸幕府と泰平の世

日本の近世は、武家政権による統一支配が特徴です。織田信長や豊臣秀吉の政権を中央政権として近世に含める学説もありますが、主に江戸時代とする考え方が一般的です。

江戸時代は、徳川家康が関ヶ原の戦いに勝利し、征夷大將軍に任ぜられた一六〇三（慶長八）年から第一五代將軍慶喜が大政を奉還し、將軍職を辞した一八六七（慶応三）年に至る二六五年間を指します。

江戸幕府は、徳川家の居城となった江戸城を中心に幕府と藩による支配体制を整備し、全国の土地・人民を支配・統治しました。徳川家による強力な領主権により、二六〇年以上にわたる長期安定政権が確立され、戦のない安定した社会を迎えることになりました。

幕府や藩は、士農工商という身分制度を定めました。経済的には、農業生産が基盤であったので、財政の安定を求めて治水工事を進め、新田開発による耕地拡大を行いました。

その結果、一七世紀以降、農業生産力は飛躍的に進展しました。農業以外の林業や漁業、鉱業などの産業も発展し、経済的に先進地域であった畿内では、手工業生産が大いに栄えました。幕府は早くから全国統治のために東海道、中山道などの五街道を幕府直轄の主要街道として整備しており、これにより、城下町や港町などを中心とする地域経済圏は全国的規模に広がっていきました。

人や物の流れが活発になる中で江戸、大坂、京都を中心に各地に城下町、港町、宿場町、門前町など様々な性格の都市が生まれ、繁栄しました。



関村絵図（貞享3<1686年>）

安桜山（北側）と津保川（南側）に挟まれた平地に幅広の方格地割が描かれ、町の繁栄が窺えます。

郡上や東国への道など各地を結ぶ重要な街道も描かれ、関が交通の要衝であったことが分かります。

関市の江戸時代

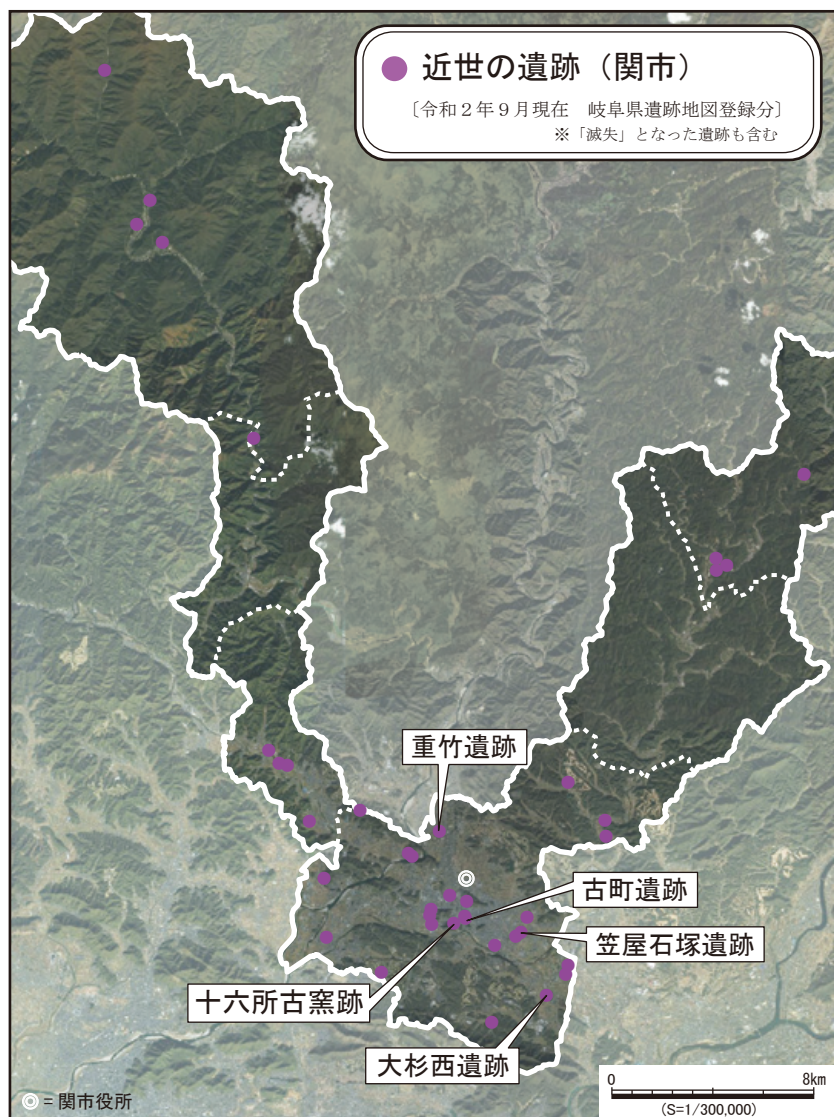
遺跡地図に登録された江戸時代の遺跡は、関地域を中心に武芸川・板取・上之保にごく少数見つかっています。

主な発掘調査例としては、関地域の重竹遺跡、十六所古窯跡、大杉西遺跡、笠屋石塚遺跡、古町遺跡です。大半の遺跡は、発掘調査が実施されていないため、詳細不明です。

前代の中世に比べて、遺跡数が少ないのは、人々の暮らしの活動が無かったわけでは

江戸時代の遺跡数が少ないのは、江戸時代の集落の立地が現代の町と重なることが多く、調査する機会に恵まれないためです。また、地域に固有の特徴的な遺跡でなければ、調査の対象にならないという事情もあります。

しかしながら、最も身近な時代が江戸時代であり、我々が見慣れた水田や水路などに地域の歴史が刻み込まれているのです。



※ 遺跡名は、図録や展示で紹介している遺跡のみ表示しています。

十六所古窯跡 (十六所)

市街地の西南部にある独立丘陵の十六所山の南東向き斜面にあります。昭和四三年（一九六八）、開発に伴う踏査により発見され、発掘調査が行われました。

発見した遺構は、江戸時代の有段連房式登窯です。関市内では、奈良時代から平安時代の窯業生産地が二ヶ所ありますが、江戸時代の窯跡としては、十六所古窯が唯一です。

残存状態はあまり良好ではなく、製品を焼き上げる焼成室四房を検出しました。窯の天井や側壁は削平されており、焚口や燃焼室は失われていました。

焼成室は幅に対して奥行きが短い長方形をしており、上段ほど奥行きが短くなっています。

各焼成室の境には段差があり、炎が上方に立ち上がる構造となっています。また、陶製の円柱を二段重ねて分炎柱とし、幅二〇cmの通炎孔を六ヶ所設けています。

窯や灰原（灰・炭や失敗品を廃棄した場所）から出土した遺物は碗、皿、香炉、線香立、播鉢などの製品と窯道具が合わせて五六〇〇点以上出土しました。

窯の性格としては、関村を治めた領主大島家の御用窯とする意見があります。



焼成室



出土品

重竹遺跡 寺下地区 (下有知)

長良川左岸の扇状地から中位段丘にかけて広がる縄文時代中期から江戸時代の複合遺跡です。

国道沿いの寺下地区では、江戸時代後期の区画溝を伴う共同墓地が見つかりました。

二三号墓穴（土葬墓）は長さ一・一五mで、長方形を呈する木棺の痕跡が確認できました。木棺の北端にはU字形に並んだ歯と寛永通宝を含む銅銭（三途の川の渡し賃）七枚が出土しました。遺体の頭部付近に添え置かれたようです。

一四号墓穴（火葬墓）は長さ八〇cm、幅六〇cmあり、墓穴の中に隅丸方形の木製容器の痕跡を発見しました。底板の一部が残っており、灰で覆われていました。灰を除くと歯二点と寛永通宝などの銅銭が七枚見つかりました。

寺下の墓地全体では、寛永通宝などの銅銭が合計

開墾塚とは？



数年前まで鋳物師屋の字笠屋には、階段状の地形を利用して、肥田瀬用水から取水した不整形な水田が広範囲に広がっていました。その中に段丘礫を積み上げた石塚4基が存在していました。

土地区画整理事業に伴い、笠屋石塚の断ち割り調査を行った結果、田んぼの敷き下げをした時の土や石を積み上げた小山（開墾塚）であることがわかりました。また、3回にわたる盛り土が確認できました。1回目は14世紀の開田時、2回目は最も標高が高い区域の大規模開発が行われた時で、その土層から須恵器が出土したことから、古代集落の存在が判明しました。3回目は近世の小規模な耕地改良時の盛土です。

笠屋石塚は地域の水田開発の歴史と古代集落の存在を記憶していたのです。

普段見慣れた田んぼや水路などの田園風景の中に地域の歴史が刻み込まれていることを笠屋石塚遺跡の開墾塚は、我々に教えてくれたのです。



鋳物師屋の水田地帯



笠屋石塚 3号



14号墓穴 (火葬墓)



寺下地区 出土品

六五枚出土しました。その他に副葬品として火打金などの道具、生前、故人が愛用していた小型の角形鏡や金銅製の合子（容器）が遺体のそばに添え置かれていたことが分かりました。